除夜の鐘

復刊80号

妙の光

大晦日の夜、除夜の鐘を撞きに大勢の方が集まる。戦時下の昭和18年に供出を命じられた後、昭和51年に新たに鋳造して、古い鐘楼に復活した鐘だ。以来毎年、除夜の鐘は皆さんに撞いていただいている。

108の煩悩を消すために撞くとはよく言われることだが、その数の意味には様々な説があって、はっきりしない。1年間を表すとか、人間の苦しみの数ともいうが、沢山ある煩悩の数を表すというあたりが妥当かもしれない。

そもそも寺の鐘は、法要の始まりを知らせる合図だった。人々はその音を聞いて手を合わせ、自身の仏心を呼び覚ます。さらには時を告げる意味も持つようになった。除夜に撞く鐘は古い年を除き去り、新しい年を迎えるときに煩悩を取り去る。そのため年内に107回撞き終えるのが本来とされ、このお参りを除夜詣という。

どこからか人増えてくる除夜詣　千原草之

通巻100号　復刊80号　2012年12月1日(季刊)　角田山妙光寺　発行　〒953-0011 新潟市西蒲区角田浜1056 TEL 0256-77-2025

行事案内

お札配り

12月中に地元の檀徒宅へ、来年のお札を持ってお経に伺います。遠方の方には、事前に予定日時をお知らせいたします。また県外等でお札ご希望の方はお知らせください。お送りします。

除夜の鐘、お焚上げ

12月31日午後10時30分、本堂にて除夜法要。11時40分頃より皆さんで除夜の鐘を撞きます。大玄関の受付で整理券をお受け取りください。甘酒等のご用意もあります。同時に古いお札、連縄等のお焚上げがあります。当日来られない方は事前に祖師堂の受付箱にお入れください。

年始参り

1月1日・2日、午前9時～午後4時。ご家族おそろいでお参り下さい。

星祭祈願

1年の安泰を個人の星回り別に祈願する「星祭」。1軒2,000円でお札をお届けします。新規でご希望の方はご家族全員の氏名と生年を書いてお申し込み下さい。継続の方は申し込み不要です。

厄除け祈願祭

2月2日(土)3日(日)午前10時。厄年にあたる方の合同祈願祭を行います。
詳細は別紙でご確認ください。

信行会とボランテラ

1月と2月の「月例信行会」「ボランテラ」はお休みします。次回は3月3日信行会。3月15日ボランテラです。

あとがき

「厳しい言葉にこそ、真心がこもっている」身延山久遠寺布教部長吉村明悦上人は、日蓮聖人の心について、熱く語ってくださいました。今号のインタビューは、是非お読みください。妙光寺とのご縁のお陰で、私も良い体験をさせていただきました。　(新倉理恵子)

安穏

「気」が集う？

小川英爾

突然の来訪者

妙光寺の玄関は日中開け放してあり、誰でもいつでも入ることができます。本堂も同様で、寒い季節の法要の際と強風のとき以外は閉めることがありません。私に時間があればどなたでもお茶を勧めて、ときにはご一緒することもあります。

先日も私が法事の始まる前に玄関で見かけた中年のご夫婦が、法要を終えて本堂から戻っても、まだ玄関の外におられました。しかもどこか思いつめた雰囲気が漂っていたのです。声をかけて上がってもらうと、「30歳で亡くなった娘の埋葬先を探しています。妙光寺さんのことを本で知って、秋田市から訪ねて来ました」と、問わず語りに辛い胸の内を話されるのです。「これまで納得できる所がなかったのですが、こちらなら安心できそうです」と、ホッとした感じで帰っていかれました。私がお話を聞けたのも、ご縁があったからでしょうか。

『水と土の芸術祭』に２５００人超す

7月15日から『水と土の芸術祭』の作品を屋根裏で展示してきました。10月早々その入場者数が２５００人を超え、会期終了の12月24日には３０００人に届きそうな勢いです。夏暑かったので、院庭にパラソルとベンチを出し、アイスコーヒーも飲めるセルフサービスのカフェを開きました。お代は百円を賽銭箱に入れてくださいと書きました。運よく本堂のお下がりのお菓子でもあれば、それは無料です。

作品が一番なのですが、カフェとお寺の雰囲気も加わってか、数ある会場の中でも人気が高いと聞きました。千個の提灯を吊るしたお盆のころには、提灯を背景に若いカップルが並んで写真を撮る微笑ましい光景も見られました。「うちも日蓮宗です。本当に気持ちのいいお寺ですね」と、声をかけてきた若いご夫婦は岡山から来られたそうで、私の方が驚きました。若い人たちからお寺に馴染んでもらえるきっかけになったのは確実です。

「気」がこもる？

秋を迎えて冷え込み始めたある日、少し離れた地区の信徒の女性３人連れが、「お参りがてら誘い合って作品見に来たわ」と言うので、囲炉裏を開いた茶の間に通しました。そこに「七百年法要の参加費の残金もあるのでお参りに来ました」と玄関に入ってきたご夫婦、なんと偶然にもお茶を飲んでいた先客と同じ村の従妹同士。お互いに「あれまあ、あんたらもお参り？」となって、お茶の席の輪が広がりました。

この日は朝からの雨が雨がやんだところに太陽の日が差し、境内全体に這うように白いもやが立ち込めました。それが雨に濡れた木々と相まって、住んでいる私にも珍しいくらい、とても幻想的な光景になったのです。「素晴らしい景色だね」「年取ったらこんな所で毎日暮らしたいね」（失礼ながらそれなりにお歳だと思うのですが…）「こうやってお茶飲みしていたら一日中でも飽きないわ。でも御前様が迷惑だって言うよ」等々、皆さん気軽に言いたいこと言って笑いながら話が弾みました。

老若男女、いろんな方の元気が集まるお寺もいいものだと思います。千葉のEさん夫妻は「久しぶりに伺いましたが、以前にも増してお寺に凝縮された何かが詰まった感じで、元気がもらえるような気がします」と言ってくださいました。

その後、先の娘さんの埋葬先を探して来られた秋田のご夫婦から、「ぜひお世話になりたい」と電話がありました。

信心

「いつも連れそって五十五年」

新潟市西蒲区下山　安藤久一さん（82歳）　一枝さん（81歳）

安藤さんご夫婦は、畑で出来た野菜をよくお寺に届けてくれる。ご主人の久一さんが車を運転して、奥様の一枝さんはお参りや裏方の手伝いに、と足繁くお寺に通う。寺の行事にお二人の姿をいつも見かける。

久一さんは、昭和6年、今住んでいる下山の地に生まれた。父・久五郎さんに視力がほとんどなく、それを母・マキさんが豆腐屋を営んで助け、5人の子どもを育てた。長男である久一さんは、軍隊予備役に志願した年に終戦を迎え、3年余り農家の手伝いに出た。その後下山に戻り、県内各地で土木工事の仕事に従事するようになった。

昭和31年、近くの農家に生まれ育った一枝さんと結婚。翌年一人息子の則光さんを授かった。一枝さんは、子育てしながら、稼業の豆腐屋を手伝った。

その後、豆腐屋はたたむことになり、一枝さんは、久一さんと共に土木工事の仕事に就く。夜も明けぬうちに夫婦そろって家を出て、現場に電車で通ったという。家の基礎工事やトンネル掘削工事の現場で、夫婦一緒に働く日々だった。現在でも、女性が土木工事の現場で働くことは容易ではないが、その当時はなおさらである。重労働もさることながら、現場にトイレが無いなど、女性にとっては厳しい環境に難儀した。雨降りの日は着替える所もなく、帰りに夫婦連れ立って風呂に行った思い出を楽しそうに語る。

「いつも一緒に現場に出て、汗を流して働くこと40年余り。大病も無くやってこれたことを、嬉しく思っています。共働きする夫婦のため、母が息子の面倒を見てくれた。これまで2人で働けたことに感謝。」と笑って語る久一さん。「夫と現場で働き、休日は家の畑仕事をし、休みなく働いてきた。キツいことも多かったけど、たまに雨風で現場が急に休みになると、家族には内緒で、そのまま2人で映画を見に行ったこともあったよ。」と頬笑む一枝さん。

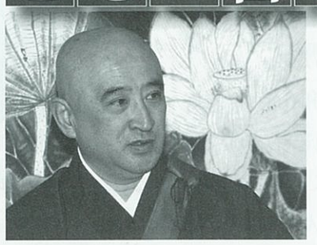
そんな仲の良い2人の楽しみは、旅行だという。お寺の団体参拝にも5回参加。それ以外にも久一さんが運転をして、身延山にお参りした。合わせて10数回は総本山にお参りしている。一枝さんは、七面山に登って以来、妙光寺の七面様によくお参りするようになった。毎年8月のお祭りも欠かさず参列する。いつも御加護を頂き、今日まで元気でやってこれたと感じている。来年3月の開創七百年の法要には、これまでのお礼の思いも込めて、夫婦で参加する。

この夏、夫久一さんが運転免許証を返上した。いつも2人で車で出かけていたことを考えると不便は否めない。その代わり、息子や孫娘が車で買い物に連れて行ってくれることが嬉しい。先日の秋彼岸は、孫娘が送り迎えをしてくれたと、にこやかに語られた。

（取材・構成　永石光陽）

開創七百年記念
インタビュー

身延山大法要のご縁をともに喜びたい



久遠寺布教部長 吉村明悦上人に聞く

来年三月、開創七百年法要を催させていただく身延山久遠寺は、日蓮聖人が53歳からの約9年間を過ごされた地です。熱心な信者であった領主波木井公が、文永11（1274）年日蓮聖人をこの地にお迎えしました。日蓮聖人は弘安5（1282）年、現在の東京大田区池上でお亡くなりになりましたが、ご遺言に従って、ご遺骨は身延山に奉安されています。七百年法要での参拝を前に、身延山久遠寺布教部長吉村明悦上人にお話をうかがいました。

Q 私は初めて久遠寺に伺ったのですが、本当に大きなお寺ですね。

吉村 日蓮宗は、全国に約五千五百の寺があるのですが、ここ久遠寺もその中の一つです。そしてここは、日蓮聖人が開山されたお寺で、日蓮宗の総本山でもあります。

Q 久遠寺には、何人くらいのお坊さんがいらっしゃるのですか?

吉村 現在久遠寺には、私を含めて54名の僧侶がいます。54人で様々なお寺の仕事を分担しています。お寺に泊まることもありますが、基本的には皆通勤しています。それ以外に、久遠寺で修行をしている人たちがいます。身延山大学と身延山高校の学生・生徒の一部、現在41名が、在院生として久遠寺の学寮に寝泊りして修行しています。それから、僧道実修生という一年間久遠寺で修行をしている人たちが、現在9名います。この実修生は、僧侶として実践的に学ぶことを希望して、久遠寺にやってきた人たちです。

Q 日蓮宗の僧侶になる際、必ず行わなければならない久遠寺での35日間の修行というものがあるそうですね。

吉村 日蓮宗の僧侶になるときには、学科テストと実技テストを受けた後に35日間の修行を行います。これは、日蓮宗の宗門が行っている修行です。五月・六月・九月と年に三回ありますが、六月は尼僧さんの修行です。この人たちは、日蓮上人のご廟所の近くにある信行道場に寝泊まりして、修行しています。

Q 久遠寺の一日の様子を教えてください。

吉村 十月から三月は冬時間で、朝五時半に大鐘を撞きます。夏時間では、朝五時に撞きます。これが、久遠寺の一日の始まりです。そして六時に、朝のお勤めが始まります。信行道場の修行僧は、うちわ太鼓を叩きながら、坂道を登ってきます。久遠寺の僧侶、在院生、実修生、皆で本堂、祖師堂、すべてのお堂で読経し、七時半に終了します。それから朝食をいただき、そして清掃ですね。その後、学生は登校し、私たち僧侶は仕事をします。読経は、交代で終日行っています。十二時、三時には、ご祈願ご回向のお経をあげます。夕方は五時に本堂を閉め、清掃をします。その後は、在院生や実修生は、読経の練習をしたり、読めないところを僧侶から習ったりしています。夜勤（やごん）といって、夜になってから読経をすることもあります。

Q 五時半ということは、その前に皆さん出勤なさるんですか?

吉村 もちろん、その前に大鐘を撞く準備もしなくてはなりませんし、遠方から通勤している僧侶もおりますから、三時半ごろには起きて支度をしてお寺に向かいます。

Q 日蓮宗の修行というのは、どういうことをするのですか?

吉村 お経の意味を学んで読みを深めたり、読経の練習をしたり、といろいろあります。たとえば、十一月から二月十日まで行われる日蓮宗の伝統的な荒行にならって、ここでも在院生や実修生が朝と夜に水をかぶっています。久遠寺では強制ではなく、あくまで各々の体力に応じてやりなさい、ということですが、朝五時半から皆頑張っています。

一般的な「修業」と「仏道修行」は、意味合いが違うと思います。「修業」は技術（わざ）を修めますが、「仏道修行」は行いを修めるのですから、精神的な意味が大きいのです。弱い自分を鍛えて、人を導き人を支えられる人間になるためのものです。そのためには技術（例えば葬儀ができるとか）があればいいわけではない。人が苦しんでいる時に、それをどう支えるかということがなければなりません。自分自身が辛いことを乗り越えないと、苦しみには応えられません。人を支えるために、精神を浄化するものが修行だと考えています。

Q 身延山で生活しておられて、日蓮聖人がこの地を選ばれた理由はなぜだと思いますか。吉村上人の実感を教えてください。

吉村 日蓮聖人は、領主波木井公に招かれて、文永11年5月17日に入山されました。日蓮聖人はその日まで、衆生救済のために文字どおり命がけで法華経の教えを広めてきたのです。そのために度重なる法難に遭い、佐渡に流罪となり、赦されて佐渡から帰り約一ヶ月半の間鎌倉にいて、そして身延山に入られました。鎌倉時代ですから、武士が権力を握る厳しい身分制社会でした。一般の商人や農民は、大変つらい生活を強いられていたのです。しかも天災が相次ぎ、疫病や飢饉、戦さが続いて、希望のない時代でした。その時代に、日蓮聖人は法華経の教えを説きました。『法華経』は、人は皆平等で、皆に幸せになる権利があり、皆が幸せになってこそ国が幸せになるという教えです。しかし、苦しい時代ですから、早くあの世に逝って楽になろう、阿弥陀様のところに行って幸せにしてもらおうという『浄土教』の教えもありました。それに対して日蓮聖人は、夢を捨ててはいけない、本当の幸せをつかまなくてはいけない、と説いたのです。そのために、時にはかなり強い言葉で、教えを説くこともありました。そんな厳しい歳月の後に、日蓮聖人は身延山に入られました。当時は今以上に身延山の自然環境は厳しく、雪が三メートルも積もったそうです。木々も生い茂っていたでしょうし、交通の便も悪い。作物も豊かではない土地でした。そういう場所だったからこそ、ここで信者さんたちが食物を分けてくださる、ご供養してくださることに、日蓮聖人は有難いとお感じになったのではないでしょうか。豊かでない環境で心の豊かさを実感された。本当の喜びと感謝をお感じになった。身延は自然への感謝を十二分に感じられる土地だった。日蓮聖人は法華経の精神をこの身延の地で体得されたのだ、と私は個人的には考えています。

Q 日蓮聖人は大変激しい方で、私は少し近づきがたいところを感じるのですが、そこには時代の厳しさがあったということですか?

吉村 『たとえ強言なれども、人を助ければ、実語軟語のことばなるべし』というお言葉があります。「たとえ強い言葉でも、人を助ける言葉ならば、意味ある言葉、軟らかい言葉であるはずだ」という意味です。幼子が道路に飛び出そうとしたら、お母さんは厳しく叱りますよね。それは、本気でその子を守りたいと思うからです。真剣であるからこそ、日蓮聖人は強い言葉も使ったのだと思うのです。

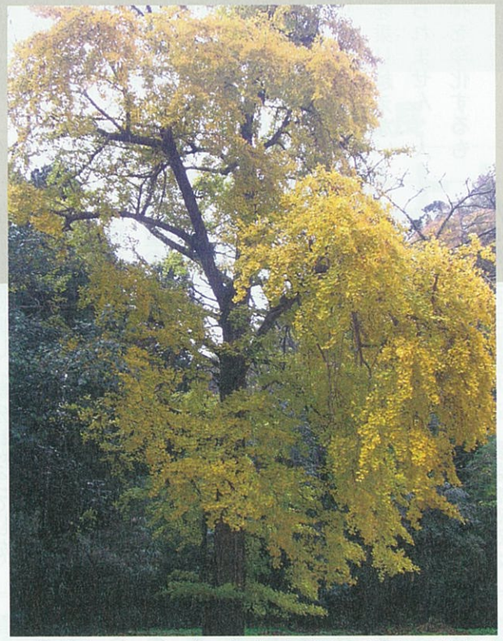
Q よくわかりました。最後に、来春の法要に参加する皆さんに一言メッセージをお願いします。

吉村 妙光寺開創七百年、おめでとうございます。また身延山への参拝、ありがとうございます。一ヶ寺での七百人の参拝は、未曾有の出来事です。本当に素晴らしいと思います。皆さんは妙光寺にご縁をいただいて、身延山に来てくださいます。このご縁は、偶然のことではありません。ご先祖様もきっと喜んでおられます。七百年記念参拝の喜びは、目に見えない先祖や、皆さんと縁を結ぶ周りの方たちの喜びでもあります。私も皆さんとのご縁を、喜びたいと思っています。どうもありがとうございました。

（聴いた人　編集部・新倉理恵子）

寺のうごき

―秋～冬へ―



本堂前の大いちょうの黄葉。大晦日に配られる銀杏はこの木のものです。

お会式と「法号授与式」

10月28日、日蓮聖人のご命日法要と、生前戒名を頂く「法号授与式」がしめやかに行われました。

授戒者は6名。法号授与に先立ち、住職の研修を受けます。

代表者が誓いの言葉を述べ、小川住職より一人ひとりに「法号」と記念の数珠他が贈られました。

法話／本間詮雄上人

法話／青木泰俊上人

今年も大玄関に、見事な菊の鉢植えが飾られています。内藤清さんと河村一良さんの丹精込めた作品です。この秋は「水と土の芸術祭」で来寺する方も多く、皆さん足をとめて菊花を楽しんで行かれます。

秋の一日研修

すっかり恒例になった春と秋の研修会。11月18日は初回の方9名を含む16名が参加しました。

お昼に頂く、手作りの精進料理も楽しみの一つです。

「水と土の芸術祭」

妙光寺を会場にした佐々木愛さんの作品。一見すると何もないような白い壁面に、下からの光で繊細なドローイングが浮かび上がる大作です。屋根裏建築の美しさと相まって大好評。会期は12月24日まで。

大晦日、二年参りは妙光寺で

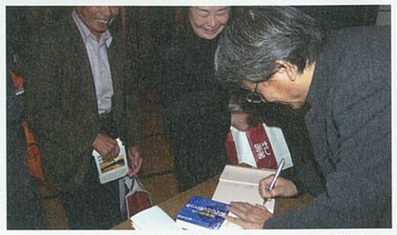
ご家族連れが多く見受けられます。

古いお札等をお焚上げ。火を囲んでスルメを焼く人も。

冬の晴れ間、雪の妙光寺もまた格別です。

お会式「特別講演」

『生と死の記憶』と題して、毎日新聞・萩尾信也記者のお話を聞きました。3月11日東京にいた萩尾記者は、コンビニで洗面具と着替えを買って、故郷釜石に直行します。それから1年間、釜石に下宿して取材を続けました。津波に襲われた町で人々があの日経験したこと。その後の1年間人々が考えたこと。スライドを使って丁寧に語ってくださいました。



お話に聞き入る満場の参加者と、著書にサインをする萩尾記者

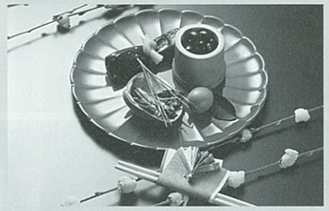
角田山妙光寺インフォメーション

受付締切
『開創七百年・身延山700人大法要』

700名には達していませんが、ホテルの部屋割りの都合で、受付締切です。総数約670名、8歳から90歳まで、バス18台で行ってきます。たくさんの皆さんの参加申込、本当にありがとうございます。

初詣
妙光寺の初詣

元旦と2日の朝9時から午後4時まで、大玄関がお年始受付で開いています。この間、住職は大広間でずっと、皆さんのおいでをお待ちしています。どなたも遠慮なく気軽にお入りください。12時頃は混雑しますので、その前後をお勧めします。



厄除け祈願祭　2月2日(土)3日(日)午前10時

毎年節分頃に行う妙光寺の「厄除け祈願祭」。厄年は役年とも言われて、男女ともに社会での役割が重くなる、責任のある年齢と重なります。同時に身体の変わり目の年齢でもあり、健康や事故に特に注意を払いましょうとの意味合いがあります。

数え年で行うため、ご自分が該当するかどうかわからない方が増えています。別紙に年齢早見表と、申込ハガキをつけました。

厄年には当たっていないけれどご祈祷をお願いしたいという方や、遠方で来られないという方も受け付けます。同封のハガキに必要事項を記入し、1月末日まで必着でご投函ください。当日欠席の方には後日お札を郵送いたします。

ご祈祷料　一人 2,000 円

開創七百年記念
桐箱入り数珠

七百年大法要の参加者に、通常価格のまま「記念の文字入り桐箱」に納めた〝数珠〟の案内チラシをお届けしました。

数珠は宗派で形が異なりますので、お持ちでない方はこの機会にお求めください。

参加されない方でも希望者にチラシをお届けします。

誌上法話　小川英爾

『法華経如来寿量品第十六』

時に我れ及び衆僧（しゅそう）　ともに霊鷲山（りょうじゅせん）に出（い）づ

この世は苦

私たちの住むこの世界は苦しみに満ちているというのが、お釈迦様の説かれる仏教の基本的な立場です。そもそもこの世に生まれて生きていかなければならない苦しみがあります。そしてやがては老いて病み、最後に死を迎えることは誰もが避けて通れない苦しみです。

また、欲しても自由にすべてを手に入れることはできず、嫌なことにも向き会わなければばらないのが人生です。家族をはじめ愛しい人との別れも人生の定めです。

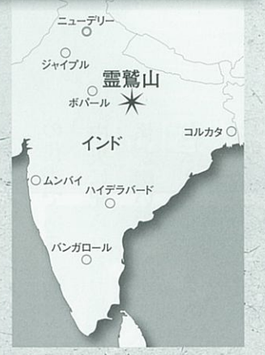
この苦しみから逃れ楽な世界にあこがれたのが『浄土教』の教えである、「極楽浄土」や「安楽世界」と言われる考え方です。

実在する霊山浄土（りょうぜんじょうど）

標題にある「霊鷲山（りょうじゅせん）」はインドに実在する山で、お釈迦様はここで『法華経』を説かれました。そのときの情景がお経の随所に記されています。「そこは平和で気候がよく、風光は美しく草木多く、花は咲き乱れ色々の果実が熟し、食料は豊かで鳥は歌い蝶は舞ってる。大勢の人々が楽しく生活し、香しい風はそよそよ吹いて花びらは揺れ、どこからともなく妙なる音楽が流れてくる」とあります。

ここに住む人々が真実を求めてお題目の信仰に熱心に務めるならば、「私（お釈迦様）は弟子たちを連れてここに現れる」と述べられたのが表題のお経です。

私もインドを旅して霊鷲山に登り、お参りしたことがあります。目に見える現実の世界は、岩山ながら緑も豊かで風がさわやかな普通の山の景色でした。でもそこで読経して、とても心の安らぐ世界が心に浮かびました。



理想の世界に向う修行を

この霊鷲山を略して「霊山（りょうぜん）」と呼び、日蓮聖人はこの霊山こそ浄土であると仰り、「霊山浄土」と称されました。こここそ理想の世界、お釈迦様の住まわれる世界で、私たちが修行に精魂打ち込む所とされたのです。

この「霊山浄土」には3つの意味があります。一つは冥土と言って私たちが死後に赴く世界という意味です。二つ目には「霊山浄土」は、この世にこそ作り出すべき理想世界です。私たちがお釈迦様の説かれた『法華経』を信じ、南無妙法蓮華経の信行をする所。すなわちこの苦しみに満ちた世界から、全ての人の心が豊かに満たされた世界ということです。そして三つ目には日蓮聖人がお釈迦様に代わり『法華経』を説かれた身延山こそが、「霊山浄土」であるという意味です。

表題のお経は私たちの理想とする世界を「霊山浄土」と言い、お題目の修行によってその実現を目指すとき、お釈迦様の悟りの境地、お釈迦様の世界に到達することができるという意味なのです。

教えて お上人

妙光寺の本堂にはどなたがいますか？

質問

妙光寺の本堂にお参りした際、
どんな仏様なの？と疑問に思いました。
本堂の仏様のことを教えてください。

妙光寺の本堂正面には、五体のお像が安置されています。正面の中央に祀られているのは、「久遠のお釈迦様」です。「久遠」というのは永遠という意味で、私たちがいつどんな世界にあっても常に仏になれますようにと、導いてくださるお釈迦様のことです。

さらに両脇におられる四体は菩薩です。2500年前にお釈迦様が亡くなられた後、お釈迦様に代わり『法華経』の教えを弘める役目を担ったたくさんの菩薩がおられますが、その代表である「四士」のお像です。中央に祀られるお釈迦様ととても関係が深いのですが、そのことは今後お伝えしていきます。妙光寺の本堂はこの五体を中心に、お釈迦様の永遠の救いの世界を現しています。

お釈迦様の手の形に注目してください。仏象の手の形はさまざまですが、こちらは手を開いたお姿で、説法印という形の一つです。永遠の命のお釈迦様は、あの世だけでなく常に現世の私たちのそばにもおられて、教え導いてくださるということを表現しています。本堂でお参りをされた方が、「心が穏やかになる」とよくおっしゃるのは、この永遠のお釈迦様の教えを体に感じ、慈悲のお心を直に受けた証だと思います。

現在の妙光寺の仏像は、平成13年の本堂建て替えの際その雰囲気に合わせて新たに奉安したものです。なかでもお釈迦様は、妙光寺と同じ日印上人が開かれた、三条市の法華宗総本山・本成寺に祀られるお釈迦様象がモデルです。このお像は日蓮聖人ご在世当時のものと伝わります。

本堂建て替え以前に祀られていた江戸時代のお像は、皆様からのご寄付で修復され、現在境内の「京住院」にお祀りしています。

寺庭から「アンニョンハセヨ！」

“こんにちは”

小川なぎさ

ここではないどこかで暮らしてみたい、とずっと思っていました。また好きな料理の勉強をしたい、とも。その2つの夢を今、心から楽しんでいます。

韓国ソウルで1ヶ月、台所のついた宿で、時々料理の授業を受けながら暮らしています。今は日程の半分が過ぎたところ。あちらこちらの市場やスーパーを歩き回り、おもしろそうな食材を買っては食し、お寺を詣でては精進料理を食べさせてもらう。先日はお寺で山のように積まれた唐辛子のへたをとるボランティアに参加して、夕食をごちそうになってきました。明日はお寺のお祭りの料理作りを、手伝うことになっています。

30年間妙光寺のために尽くしてきたご褒美というにはあまりにも贅沢ですが、まさか本当にこんな素晴らしいプレゼントがいただけるとは、思ってもいませんでした。一日をまるごと自分のために使えるということは、私の日々の暮らしの中では無いことだったので、しばらくは落ち着かない心持ちでした。でも健康になろうと自分の足で歩き回り、生活のリズムが整ってくると、けっこうきちんと生活できるものなのだということも分かってきました。

「韓国の寺の精進料理は寺刹料理という。季節の食材を使い、人間の体質と特性に合った菜食主義の料理で、すべての植物が持つ薬理効果を分散させず最大化する方法で料理する」という考えの尼僧さんにお会いしました。僧侶でありながら、栄養学の専門家で研究者でもあり毎日多忙な方なので、その方の一番弟子の先生に料理の手ほどきをうけています。

料理をただ作り続けてきただけの私が、目的や考え方を持つ料理を目の当たりにして動揺したのは言うまでもありません。教えていただいたことが、頭の中をかけめぐっています。「どうして料理をならいたいのですか？」と聞かれ、「私の寺のみなさんに美味しいものを食べていただきたいからです」と答えたことは本当の気持ちです。

後半は料理上手なアジュマ（おばさん）から韓国の家庭料理を習う予定です。

その土地の食材と風土が料理を作るのだ、とあらためて実感しています。帰ったら、経験したことをじっくりと思い起こして台所に立ちます。妙光寺の行事料理、また自分の日常のごはん作りがどう変わるのか、少し楽しみです。

あっという間に年末です。境内の銀杏ははたして豊作でしょうか？ 帰ったら急いで準備しますので、除夜の日には暖かくしてお出かけ下さいね。